北海道芦別高等学校

課　程：　全 日 制
学　科：　普 通 科
生徒数：　３４５名

１　取組の特徴

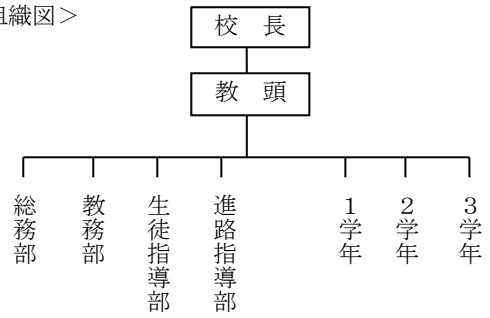
構成的グループエンカウンター等を通して、自己理解・他者理解を深め、自己変容・自己成長を図るとともに、他者との間で思いやりや助け合い、支え合う人間関係を育む。

２　取組のねらい

円滑な人間関係を構築する力を育成し、そのことにより自己理解の深化や自己改善の手法を習得することを目指す。

また、教員の予防的・開発的な教育相談スキルの向上を目指す。

＜組織図＞



３　取組の経過

４月
　１学年　：宿泊研修において構成的グループエンカウンターを実施
　１・２学年:「ほっと」の実施
５月
　１学年　：望ましいコミュニケーションについて考える取組①
　全学年　：ケータイ安全教室における異学年男女混合グループによるディスカッション
９月
　１学年：望ましいコミュニケーションについて考える取組②
　全学年：薬物乱用防止教室における異学年男女混合グループによるディスカッション
11 月
　全学年：講演会「思春期外来を受診する高校生～何で悩み、何で困っているのか」

４　取組の内容

１　集合ゲーム（非言語によるコミュニケーション）
ことばを発することなく、指定された人数のグループを作るゲーム

《生徒の感想》
- ことばがなくても目や四肢で表現してコミュニケーションができることに気付いたが、改めて、ことばの大切さを知ることができた。
- 相手を尊重しながら会話することは難しく、また大切だと気付いた。
- 当たり前に話していることがコミュニケーションで最も重要だと感じた。

（集合ゲーム）

4　取組の内容

2　伝言ゲーム

集団において、情報伝達の仕方を比較しコミュニケーションの工夫を図るゲーム

《生徒の感想》

・人の話をしっかり聴くことの大切さを感じた。
・あやふやなまま、ことばを伝えないように気を付けようと思った。
・ことばの他に、表情なども大切だと思った。
・ことばは、他人を傷つけてしまうことがあるので気を付ける。

3　ほめほめゲーム

自分の長所について他者から指摘してもらうゲーム

《生徒の感想》

・ほめられると恥ずかしいけれどうれしかった。
・感謝を伝えると相手も自分も良い気持ちになれた。
・普段からもっとほめ合えば良いと思った。
・普段あまり人と関わっていなかったので難しかった。

（ほめほめゲーム）

4　講演「思春期外来を受診する高校生～何で悩み、何で困っているのか」

市立旭川病院の精神科医　武井　明先生に、思春期外来を受診する高校生についての講演

《生徒の感想》

・精神科は話を聴いてくれる場所だということが分かって良かった。
・専門の先生の話が聞けて、心が軽くなった気がする。
・男子より女子の方が病院へ行く割合が高いが、相談が深刻なのは男子の方に多いと知った。
・人に相談することは恥ずかしいことではなく、大切なことだと分かった。

5　次年度に向けて

1　成果

ア　中途退学者数及び不登校生徒数の推移

昨年同様、中途退学はいないが、不登校生徒が増加した。

イ　その他の指標による評価

事業の取組の成果で悩みを相談しやすい環境になりつつあり、保健室年間相談者の延べ人数は、昨年より増加傾向にある。また、1人当たりの欠席日数が減少するとともにボランティア活動への参加人数が増加した。

ウ　「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

活発に自身の気持ちを表現できる生徒がいる一方、自己表現が苦手な生徒も多く、相手への配慮を言葉にできずに人間関係をギクシャクさせてしまうことがあり、これからもスキルを高めていく必要がある。

エ　生徒の変容した姿

友人関係の幅が広がり、お互いの個性を受け止める寛容さが見られるようになった。

2　課題

ア　コミュニケーショントレーニングを全学年で実施する。
イ　自己表現力を高め、合わせて他者への配慮・理解力も高めていく。

3　次年度に向けて

ア　全校的な取組に発展させる。「ほっと」の分析を学年・ＨＲ経営に活かし個人面談等においても活用する。
イ　授業や特別活動等で導入しているアクティブ・ラーニングにおいても、コミュニケーションスキルを高める機会としていく。

北海道札幌北高等学校

課　程：　定時制
学　科：　普通科
生徒数：　１８３名

１　取組の特徴

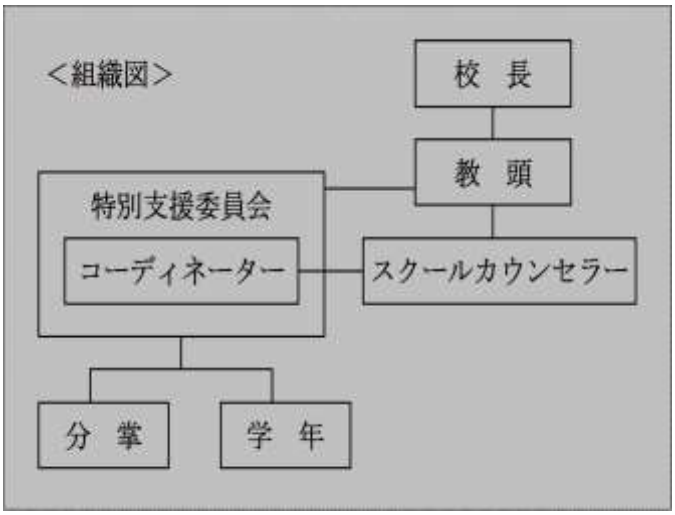
人間関係づくりやコミュニケーションスキルの育成を図ることを目的として、次の事項を重点的に取り組む。

(1) スクールカウンセラーを活用したメンタルヘルスに関する取組

(2) 特別支援学校との交流による教職員の特別支援教育に対する理解とスキルの向上

２　取組のねらい

中学校時代に、不登校のため基礎的な学力が身に付いていない生徒、中途退学する生徒及び教育上特別な支援を必要としている生徒など様々な生徒が在籍していることから、生徒の自立を促すために、生徒個々に応じたきめの細かい支援とケアが求められており、カウンセリングを通して生徒のコミュニケーション能力の向上を図る。



３　取組の経過

４月　カウンセラーによる新入生講話
- 対　象　第１学年
- テーマ　ストレスチェック
- 講　師　スクールカウンセラー　山本　　創　氏

７月　子ども理解支援ツール「ほっと」の実施後、分析結果を教職員で共有

９月　特別支援学校との相互交流事業
特別支援学校との教職員交流（施設見学・授業公開・交流会等）

12月　校内研修会
- テーマ　発達障がいについて
- 講　師　北海道札幌稲穂高等支援学校　教頭　渡辺　晃史　氏

２月　子ども理解支援ツール「ほっと」の実施後、分析結果を教職員で共有
北海道札幌稲穂高等支援学校研究会への参加・交流

３月　校内研修会
- テーマ　本校における事例について
- 講　師　スクールカウンセラー　山本　　創　氏

4　取組の内容

1　カウンセラーによる新入生講話　（５月実施）

１年生を対象に、本校のスクールカウンセラーからカウンセリングについての講話を受けた後、メンタルヘルストレーニング（ストレスチェック）を実施した。

2　相互交流（９、12、２月実施）

ア　ねらい　本校において、発達障がいを抱える生徒や対人関係の構築に困難を抱える生徒等、多様な生徒に対応する指導方法について理解を深める。

イ　対　象　関係教職員

ウ　内　容　北海道札幌稲穂高等支援学校の教員が本校を訪問し、授業参観や懇談を実施するとともに、北海道札幌稲穂高等支援学校の研究会に本校の教員が参加するなどの相互交流を行う。

エ　成果等　昨年度から、北海道札幌稲穂高等支援学校と定期的な交流を実施している。「ほっと」の分析結果をより有効に活用することや、生徒の実態に応じた適切な指導の在り方について理解が深まった。

5　次年度に向けて

1　成果

ア　中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者は、前年度から減少傾向にあり、今年度も依然として安定している。特に２学年での退学者の減少が顕著である。不登校生徒数はどの学年も大きく減少した。今年度は更なる減少が見込まれる。

イ　その他の指標による評価

昨年度からの特別支援学校との交流事業により、特別支援教育に対する本校教職員の理解が進み、生徒一人一人に応じた効果的な個別指導が可能になってきた。

ウ　「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

生徒一人一人の特徴を把握する方がよりその後の取組に有益な情報となり得る。また、生徒本人の自己分析の結果に教員から見た生徒像を重ね合わせることが、「ほっと」を効果的に活用する上での重要なポイントであると考えている。

エ　生徒の変容した姿

生徒も大変落ち着いており、授業などにも真剣に取り組んでいる。

2　課題

ア　コミュニケーション能力の向上と社会性を身に付けさせること

イ　専門機関との連携による特別支援教育の理解と充実

ウ　特別支援に関わる教職員の更なるスキルアップ

3　次年度に向けて

高校入学時の予防教育に重点をおき、１学年を中心に「ほっと」の活用を図り、分析後の担任による面談、及び教員間の情報共有等に生かしていきたい。

北海道札幌月寒高等学校

課　程：　定時制
学　科：　普通科
生徒数：　１０５名

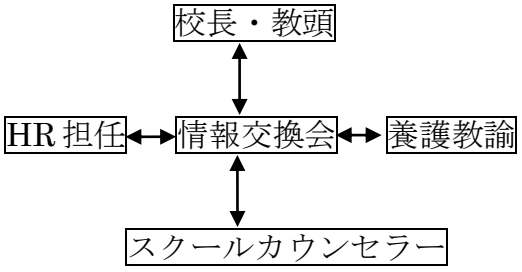
1　取組の特徴

(1)　生徒の自己肯定感を高めるための支援
(2)　情報交換会（教職員）における生徒理解の徹底
(3)　スクールカウンセラーによる予防的・開発的教育相談の実現と情報交換会との連携

2　取組のねらい

高校入学後、できるだけ早い時期から、教育相談、進路相談及び健康相談等各種面談を通して、多角的に生徒理解を図るとともに、ＨＲ担任、教科担任、養護教諭及びスクールカウンセラーによる情報交換会や各種研修会等において、本校職員の共通理解の充実を図る。

＜組織図＞



3　取組の経過

４月　・教育相談
５月　・子ども支援理解ツール「ほっと」の実施（全学年）
６月　・宿泊研修（２学年）で、お互いの夢を語り合う時間を設定。
　　・進路相談
７月　・就業体験とボランティア活動
９月　・ＳＣを交えた情報交換会の実施
10月　・ＳＣによる教職員対象の生徒理解のための研修会
　　・教育相談
11月　・子ども支援理解ツール「ほっと」の実施（全学年）
２月　・ＳＣを交えた情報交換会の実施
※養護教諭による健康相談　通年

4　取組の内容

１　生徒の自己肯定感を高めるための支援

ア　ねらい　・生徒同士及び生徒と教員間のコミュニケーションを充実させる取組の実施により、生徒のコミュニケーション能力の向上及び教職員の共有理解を図る。

イ　対　象　・子ども理解支援ツール「ほっと」（全学年）
・宿泊研修での夢を語り合う（２学年）
・年４回の教育相談（全学年）

ウ　内　容　・２年生の宿泊研修において、生徒たちは体育的行事で協調性を育み、進路学習で自分の将来の夢を語る。
・担任、副担任は自クラスの生徒全員と面談し、養護教諭は生徒全員と面談する

エ　成果等　・２年生での宿泊研修においては他人を尊重し、人の話を聞く態度に変化が見られる。
・数多くの面談を通し、教職員が生徒理解を深め、さらに、生徒たちのコミュニケーションスキルが徐々に向上している。

4　取組の内容

2　スクールカウンセラーによる予防的・開発的教育相談の実現と情報交換会との連携

ア　ねらい　・生徒や保護者の不安や悩み等を解消し、安心して学校生活を送ることができるよう支援する。
・生徒に関する情報を教職員で共有化を図り、スクールカウンセラーによる情報提供により、教職員のスキルアップを図る。

イ　対　象　・教育相談（希望生徒又は保護者）
・情報交換会（教職員）

ウ　内　容　・生徒又は保護者へのカウンセリング及び助言を行う。
・情報交換会によって、生徒に関する情報の共有化を図る
・スクールカウンセラーによる様々な事例研修を行う。

エ　成果等　・スクールカウンセラーに生徒や保護者の悩みを直接聞いていただいたり、養護教諭を通して生徒の様子をスクールカウンセラーに伝え、適切なアドバイスをいただいたりすることができた。
・解離性障害やリストカット（自傷行為）等の事例を研修会で紹介していただき、教職員のスキルアップを図ることができた。

3　就業体験及びボランティア活動

ア　ねらい　・生徒に「働く」意味を理解させる。
・地域に育てられている意識を高める。

イ　対　象　・希望者

ウ　内　容　・様々な業種から希望の職種を選ばせ、面接から行う。
・近隣の公園などを清掃する。

エ　成果等　・就業体験をした生徒たちの意識に変化が現れ、就業（含むアルバイト）をする生徒が増えた。
・ボランティア活動を通して、奉仕の精神を養うことができた。

5　次年度に向けて

1　成果

ア　中途退学者数及び不登校生徒数の推移

H28 年度　12 名　　H27 年度　19 名　　H26 年度　10 名　　H25 年度　12 名

H28 年度については入学者数が多い中で中途退学者が少なかった。

イ　その他の指標による評価

アルバイト就業率が 4 月には 57.8%だったのが、1 月には 66.0%と上昇した。特に 1 年生就業率が大幅に上昇していることから、社会に目を向けて生活していこうとする意識が高まっていると考えられる。

ウ　「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

「ほっと」を実施しているが、分析結果について、教職員間での共有が課題である。生徒のコミュニケーションスキルは、教育相談や様々な場面等での指導により向上している。

エ　生徒の変容した姿

日常の学校生活から、入学当初はコミュニケーション能力が不足していた生徒も、学年が進むにつれてコミュニケーション能力が向上していると見受けられる。

2　課題

「ほっと」は実施しているが、分析結果の共有化まで進んでいないことから、さらなる生徒理解のためにも結果等情報の共有化に取り組む必要がある。

3　次年度に向けて

ア　「ほっと」の計画的な実施と、分析結果を活用した教職員研修の充実を図る。

イ　情報交換会における生徒情報の共有化を図る。

北海道札幌東豊高等学校

課　程：　全日制
学　科：　普通科
生徒数：　８７２名

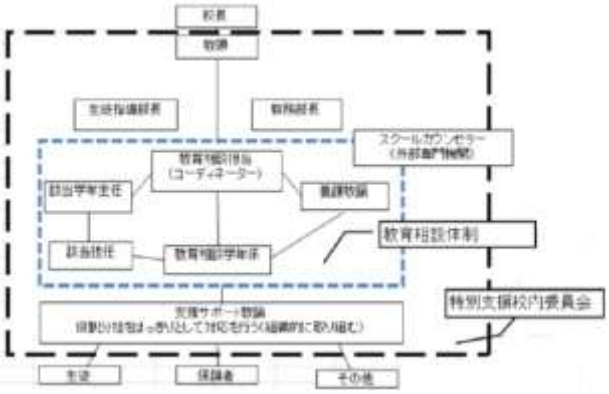
１　取組の特徴

ボランティア活動など様々な体験活動の機会を通してコミュニケーションスキルの育成を図り、人間関係形成能力を高める。

２　取組のねらい

人間関係形成能力を高めるために、ボランティア活動など様々な体験活動を行うとともに、子ども理解支援ツール「ほっと」と心理検査の結果を、生徒との個別相談や教員及び保護者への助言及び指導資料として活用し、教育相談の充実を図るとともに支援体制を充実させる。

＜組織図＞



３　取組の経過

４月　心理検査ＴＫ式Ｍ２－ＤＶ実施
６月　心理検査ＴＫ式Ｍ２－ＤＶの活用
　　宿泊研修（集団カウンセリング）実施
　　交通安全啓発活動実施
７月　交通安全啓発活動実施
　　校内研修開催
　　東区地域子ども夏祭り参加
10月　子ども理解支援ツール「ほっと」実施
　　町内清掃ボランティア実施
11月　学校評議員と生徒会執行部による異世代交流実施
２月　札幌雪まつり（つどーむ会場）に参加

※通年　生徒玄関での教員と生徒会執行部による毎朝の挨拶運動を実施

４　取組の内容

１　朝の挨拶運動

ア　ねらい

学年を越え、場に応じた適切な挨拶を通して、コミュニケーション能力の向上を図る。

イ　対　象

全校生徒

ウ　内　容

① 生徒指導部が中心となり、輪番制の玄関立ち番指導計画を作成する。
② 生徒会執行部が、生徒会挨拶運動計画を作成する。
③ 生徒指導部が、全教員に、生徒会挨拶運動計画を加味した指導計画や活動方針について説明するとともに、生徒指導部通信を発行し、全校生徒への周知を図る。
④ 生徒会執行部が、生徒会通信を発行し活動を周知するとともに、朝の挨拶運動を実施する。

エ　成果等

生徒同士や教員が、挨拶を交わすことにより、人間関係構築の基盤づくりと問題行動等の未然防止に効果が見られる。

２　学校説明会

ア　ねらい

本校への新入生が安心して入学できるよう、説明会の工夫を図る。

イ　対　象

関係生徒

ウ　内　容

中学生へ、高校生活・施設・部活動について、生徒により説明及び案内を行う。

① 受付
② 校長挨拶　本日の日程説明
③ 学校説明（生徒による説明～行事、課外活動、高校生活、進路状況等）
④ 体験学習
⑤ 施設・部活動見学

エ　成果等

・本取組を担当した在校生から、学校や友人の良さについて一層理解を深め、充実した学校生活を送る一助となったとの声が聞かれた。
・新入生から、本校の様子が理解できた上で学校生活をスタートできることにより、前向きな人間関係を築こうとする雰囲気が醸成され始めた。
・意欲的に高校生活を過ごしたいと望む生徒の増加により、お互いを認め合うことに繋がり、円滑な人間関係の構築がスムーズに行われるようになった。

５　次年度に向けて

１　成果

ア　中途退学者数及び不登校生徒数の推移

不登校生徒数及び中途退学者は、減少したが、特に、１年生の中途退学者が大きく減少した。

イ　その他の指標による評価

保健室年間相談者数が全ての学年において減少した。

ウ　「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況及び生徒の変容した姿

10 月に１年生８クラス（全クラス）、２年生と３年生２クラスを抽出して実施した。

男子は全学年全クラスで「称賛」と「遵守」が低く、「拒否」が高いという同じような傾向が見られた。また、「４因子」の得点傾向は「自己統制」が低い傾向が見られた。

女子は全学年全クラスで「忠告」と「拒否」が低く、「緊張」が高い傾向が見られた。また、「４因子」の得点傾向は「自己統制」が低く、「関係維持」が高い傾向が見られた。

２　課題

ア　スクールカウンセラーを活用した教育相談の更なる充実が来年度の課題である。

イ　各種検査をさらに活用し個別の支援計画を適宜作成する。

３　次年度に向けて

ア　定期的なスクールカウンセラーによる教育相談の実施を図る。

イ　生徒主体による地域への様々な活動を、より一層促進し、自己肯定感をもたせるように計画する。

ウ　ボランティア活動等体験活動の参加者人数（延べ人数）が減少した。今後、積極的にボランティア活動等体験活動の参加を呼びかけていきたい。

北海道札幌あすかぜ高等学校

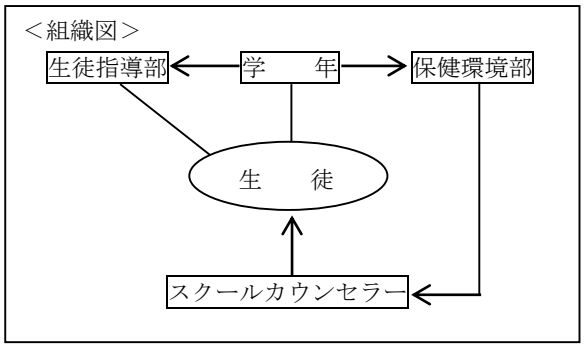
課　程：　全日制
学　科：　普通科
生徒数：　９１５名

1　取組の特徴

構成的グループエンカウンターやスキルアップトレーニングを通して、自己理解・他者理解を深め、自己を理解するとともに他者との間で思いやり、助け合い、支え合う人間関係を育み、人間関係形成能力を高める。

2　取組のねらい

生徒のもつ自己理解や他者理解及び思いやりの心を育み、望ましい人間関係づくりを支援するためのソーシャルスキルトレーニングを通して、生徒の人間関係を形成する能力やコミュニケーション能力の育成を図る。



3　取組の経過

４月　・宿泊研修における「構成的グループエンカウンター」の実施
５月　・担任面談
６月　・Ｑ－Ｕの実施
　　・薬物に関する講演会
７月　・学校祭
　　・星置運河清掃ボランティア
８月　・高大連携教育
10月　・職場１日体験
　　・スクールカウンセラーによるスキルアップトレーニング１回目
11月　・スクールカウンセラーによるスキルアップトレーニング２回目
12月　・北海道教育庁産業医元田夏紀氏によるステップアップ講演会
２月　・「ほっと」の実施

4　取組の内容

１ スキルアップトレーニング

ア　ねらい

構成的グループエンカウンターやピアサポートの手法を用いて、自己理解・他者理解を深めることにより、よりよい人間関係構築に役立てる。

イ　対　象

１学年生徒（８学級 311 名）

ウ　内　容

２クラスで 10 名から 12 名のグループを８つ作り、スクールカウンセラーより自己紹介や他己紹介、天使や悪魔の聞き手の方法と実践を行った。

エ　成果等

１グループに教員が１名ついて実施した。グループ内でのシェアリングを行うことにより、自分と同じ意見をもっている生徒が多くいることに驚き、より積極的に他者と関わっていこうとする姿勢が見られた。さらに、聞く姿勢を変えることで相手との友好関係が構築されることも学んだ。

4　取組の内容

2　ステップアップ講演会

ア　ねらい

スキルアップトレーニングのまとめとして、これからの自分について考える機会とする。

イ　対　象

１学年生徒（８学級 311 名）

ウ　内　容

北海道教育庁産業医元田夏紀氏を招き、「今からできる３つのこと」と題して講演をしていただいた。

エ　成果等

スキルアップトレーニングの総括として行った。生徒自身は、自分も諦めずに最後まで頑張り抜こうという意思をもつことができた生徒が多く、将来のことを真剣に考える生徒が増えた。

5　次年度に向けて

1　成果

ア　中途退学者数及び不登校生徒数の推移

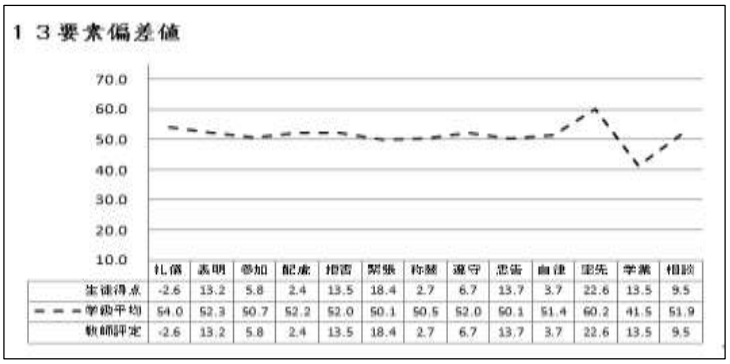
・中途退学生徒については、前年度から減少傾向にある。
・不登校生徒については、前年度と比べ、ほぼ横ばいである。

イ　その他の指標による評価

自ら積極的に海外研修やボランティア活動等に参加する生徒が増え、対人関係や他者との関わりを積極的にもつなど、生徒の意識に変化が見えた。

ウ　「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

１学年で実施した結果、「学業」の項目を除き、ほぼ全道平均で推移していた。
Ｑ－Ｕと両面での活用を今後検討していかなければいけない。



	礼儀	誠実	参加	配慮	規律	関係	自尊	遵守	思考	自律	目先	学業	相談
生徒得点	-2.6	13.2	5.8	2.4	13.5	18.4	2.7	6.7	13.7	3.7	22.6	13.5	9.5
― ― ―学級平均	54.0	52.3	50.7	52.2	52.0	50.1	50.5	52.0	50.1	51.4	60.2	41.5	51.9
教師評定	-2.6	13.2	5.8	2.4	13.5	18.4	2.7	6.7	13.7	3.7	22.6	13.5	9.5

エ　生徒の変容した姿

生徒からは、生徒間で互いに話を聞き合ったり、他人の気持ちを考えて行動したりするという変容が見受けられた。

2　課題

ア　より円滑な人間関係構築のため、アサーショントレーニングの導入

イ　怒りをコントロールするアンガーマネジメントの研修・実施

3　次年度に向けて

ここ最近、友好的な人間関係・家族関係等の悩みを抱え、精神的・身体的にも不安定な状態となっている生徒が増加してきているのが現状である。さらに、カウンセリングを希望する生徒も多く、より一層スクールカウンセラーと連携・協力して有効な対策・支援を学校全体として継続的に行っていく必要がある。また、アクティブラーニング的手法を通して自分を考える時間を作り、今必要なことを考えさせ実行させることで、他者との関わりを強く意識した生活を送ることを心掛けるよう、手助けすることが大切だと考える。

北海道札幌琴似工業高等学校

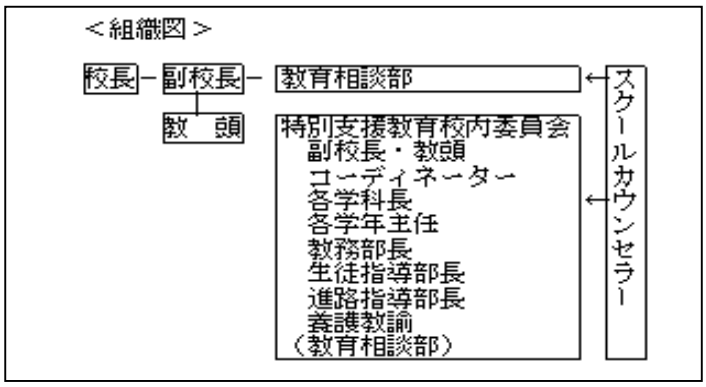
課　程：　全日制
学　科：　工業科
生徒数：　９２３名

１　取組の特徴

予防的・開発的教育相談を通して、日常の学校生活はもちろん進路実現や社会生活において必要不可欠なコミュニケーション能力のスキルアップを図る。

２　取組のねらい

・集団カウンセリング及び体験的な活動を通じたコミュニケーション能力の育成に向けた取組の充実を図る。
・生徒のコミュニケーション能力の育成を推進するための教職員研修の充実を図る。



３　取組の経過

※　個人面談は通年（不定期）で実施

４月　・アセスメントに関する教職員研修
　対象：１学年担任
　内容：アセスメントの種類や目的、データの読み取り方､利用方法について
・「ASSESS」（１回目）の実施
　対象：全学年

５月　・教科合同会議での生徒の状況把握
　内容：「ASSESS」（１回目）結果のシェアリング
・校内研修会（１回目）
　「配慮を要する生徒、気になる生徒、不登校傾向にある生徒の状況について」(主催：特別支援教育校内委員会)

６月　・教科合同会議での生徒の状況把握
・「ほっと」（１回目）の実施
　対象：全学年

７月　・「ほっと」に関する教職員研修
　対象：１学年教諭
・「ほっと」のシェアリング
・コミュニケーションスキルアップ教室（１回目）
　対象：１学年
　講師：太田　滋春氏（本校ＳＣ）
　「ｽﾏｲﾙﾄﾚｰﾆﾝｸﾞとｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝｽﾀｲﾙ」
　「ほめっせーじとだめっせーじ」
・コミュニケーションスキルアップ教室（２回目）
　対象：１学年
　講師：太田　滋春氏（本校ＳＣ）
　「不安・苦手を克服してたくましく」

９月　・校内研修会（２回目）
　「配慮を必要とする生徒の対応について」

10月　・「ほっと」（２回目）の実施
　対象：全学年

11月　・教科合同会議での生徒の状況把握
・「ほっと」のシェアリング

12月　・「ASSESS」（１回目）実施
　対象：全学年
・「ASSESS」（２回目）結果のシェアリング

２月　・校内研修会（３回目）
　「支援が必要な生徒の対応について」
　講師：太田　滋春氏（本校ＳＣ）

4　取組の内容

1　教職員研修

①「学校環境適応感尺度『ASSESS』の実施に関して」（対象：１学年担任）

・アセスメントの種類と目的、「ASSESS」実施の理由と検査の特徴、データの利用方法と利用上の注意点について

・結果分析と情報交換（対象：全学年担任、全学年教科担任）

②「子ども理解支援ツール『ほっと』に関して」（対象：１学年担任）

・実施の目的、データの読み取り方、利用方法について

・結果分析と情報交換（対象：１学年担任、１学年教科担任）

③校内研修（１回目）

「配慮を要する生徒、気になる生徒、不登校傾向にある生徒の状況について」（対象：全職員）

・該当生徒の特徴や状況の説明

・配慮等の確認、情報共有

校内研修（２回目）

「配慮を必要とする生徒の対応について」（対象：全職員）

・発達障害の特徴とサポート

・学校でできる声かけ、配慮

校内研修（３回目）

「支援が必要な生徒への対応について」（対象：全職員）講師：太田　滋春氏（本校ＳＣ）

・支援の視点クイズ（日本語版　ＡＱテストなど）

2　コミュニケーションスキルアップ教室（１回目）

ア　ねらい

高校生の人間関係を形成する力やコミュニケーション力の育成を図り、不登校や中途退学を予防・未然防止することにつなげる。

イ　対　象

１学年全員

ウ　内　容

「こころのスキル　コミュニケーション」～笑顔になると色々とうまくいく

・コミュニケーションの姿勢と表情の重要性についての説明

・表情筋トレーニング（体験ワーク）

・スマイルトレーニング（体験ワーク）

「ほめっせーじを大事にしたコミュニケーション」

・パンダキャラクターをモデルにしたコミュニケーションスタイルの紹介と対応の仕方（ほめるメッセージとダメだしメッセージの効果と適切なコミュニケーションの取り方）

・ほめっせーじのアドバイス（アサーショントレーニング）

・ほめっせーじによる仲間の良いところ書き出しと告白（エンカウンター）

エ　成果等

高校入学から約３ヵ月経過し、なかなか友達が作れず、コミュニケーションに戸惑う生徒がいるなか１回目の教室を実施した。開始直後は表情も硬く、ぎこちなさや緊張した様子も見えたが、太田講師主導による体験活動とトレーニングによって、次第に生徒の表情がほぐれ、笑い声や積極的な元気な声が聞こえるようになった。また、担任から「クラス内の生徒相互のコミュニケーション活動を深めるきっかけになった」との声もあり、一定の成果を得ることができた。

4　取組の内容

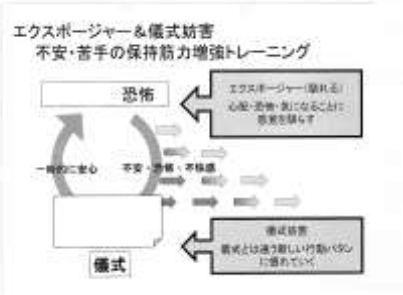
3　コミュニケーションスキルアップ教室（２回目）

ア　ねらい　高校生の人間関係を形成する力やコミュニケーション力の育成を図り、不登校や中途退学を予防・未然防止することにつなげたい。

イ　対　象　１学年全員

ウ　内　容　「不安・苦手を克服して強くたくましくなる」～エクスポージャーと儀式妨害～

・「リラックスってとても大事」についての説明
・簡単にできるリラックススキル　アレンジ版（体験ワーク）
・不安・苦手の保持筋力増強トレーニング（体験ワーク）
・恐怖と儀式の例を参考に克服方法を考えよう
・エクスポージャーとチャレンジについての説明
・課題シートを使って、自分を変えていこう（課題ワーク）



エ　成果等　スキルアップ教室（２回目）のテーマは事前に生徒に希望を募り実施した。テーマの内容については以下の４項目から選び希望の多いものとした。

① 不安・苦手を克服して強くたくましくなる　（回答　121）
② 自分の考え方のクセを理解してうまく付き合う　（回答　82）
③ 問題解決のためには沢山のアイディアが大事　（回答　47）
　たくさんのアイディアを生み出すこころのスキル
④ その他（リクエストを記載）　（回答　48）
　（未回答　14）

生徒からは体験ワーク、課題ワークを通じ不安・苦手克服のヒントを見つけ、積極的にチャレンジする姿が見受けられた。

５　次年度に向けて

１　成果

ア　中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者、不登校生徒数は昨年より半減した。

イ　その他の指標による評価

・スクールカウンセラーの面談者数は、生徒、保護者、教職員ともに増加し、心的負担軽減につながった。

・欠席日数も昨年より減少した。

ウ　「ほっと」の実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

・今年度初めて全学年で２回実施した。複数回実施することにより、生徒の変容を正確に捉えることができた。校内における「ほっと」の位置付けを明確にし、教育活動の助成につなげたい。

・13 因子では、学年によって偏りはあるが「緊張」「学業」「相談」「配慮」「称賛」の因子に低い特徴が現れている。教師と生徒、生徒と生徒の間に話しやすい雰囲気を作り、生徒が自己開示しやすい環境を作り、コミュニケーション能力を育成したい。また、学習活動を不安・苦手とする生徒が各クラスに半数程度いることが分かった。

エ　生徒の変容した姿

・１年生にとってコミュニケーションスキルアップ教室が、本校のスクールカウンセラーとの初顔合わせになる。これがきっかけとなってカウンセラー面談につながるケースがあった。また、集団トレーニングを実施することでクラスの人間関係が円滑になり、その後の行事やクラス経営が円滑に進んだ。

・アセスメントの結果を教員間で共有することで、生徒の実態を把握することができ、生徒を指導する上で、貴重な参考資料として活用できた。

２　課題

ア　１学年で実施しているコミュニケーションスキルアップ教室は、生徒、担任からも大変好評であり今年度も７月に２回実施した。生徒間の人間関係をより円滑にするための手助けや担任がクラス経営をする上で早い時期での実施が望ましい。スクールカウンセラーとのスケジュールを早い段階で調整し、今後も継続して集団トレーニングを行うこと。

イ　「ASSESS」と「ほっと」の有効な活用法や研修の実施に関すること。

３　次年度に向けて

ア　クラスの人間関係が大きく影響する学校行事等を迎える前の５月、６月に、コミュニケーションスキルアップ教室を実施できるように年間計画に位置付ける。

イ　本校で作成した生徒支援引継ぎシートを活用して中学校との連携を図り、支援が必要な生徒や不登校傾向にある生徒の実態を把握し、担任との連携を図る。

ウ　「ASSESS」と「ほっと」の実施に関しては、担任向けに、目的、実施の理由、検査の特徴、データの利用方法、利用上の注意点等の研修会を開催しているが、教職員全体で研修を深める。

エ　各種研修会への参加で身に付けたカウンセリングの手法やコミュニケーションスキルの育成法を学校、生徒に還元する。

北海道有朋高等学校

課　程：　単位制
学　科：　普通科･事務情報科
生徒数：　３０４名

1　取組の特徴

(1) 北海道医療大学心理科学部臨床心理学科の大学生によるピア・サポート活動と学習支援を実施する。
(2) スクールカウンセラーによる個別カウンセリングを充実させる。
(3) 地域と連携したボランティア活動により、生徒の自尊感情や自己肯定感を育成する。

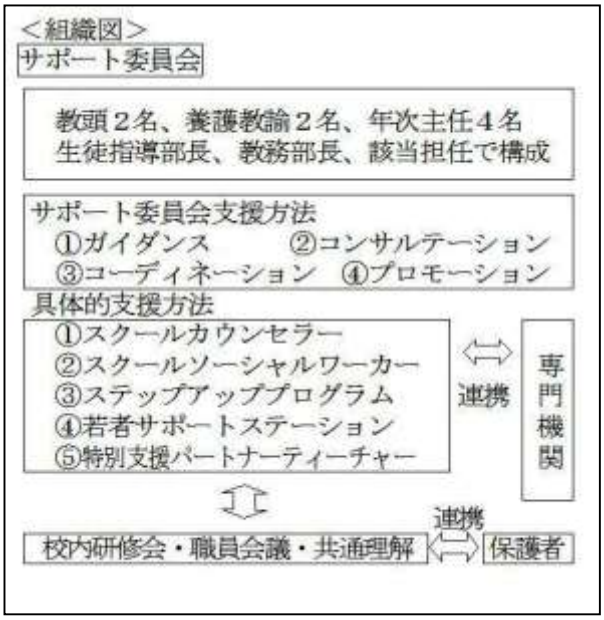
2　取組のねらい

小中学校時代に受けたいじめや学習の遅れなどによる自信喪失のため、授業の参加に意欲を失い、現在もそのことが原因で学校生活に支障をきたしている生徒が多い。

そのような生徒にコミュニケーションスキルの向上によって自信をもたせ、より円滑な人間関係を構築できるよう支援する。

支援に当たって、平成 24 年度から北海道医療大学心理科学部臨床心理学科の「臨地実習」に関わる学生の全面的協力を受け、取り組んでいる。

また、スクールカウンセラーによる面談の様子から多角的な支援の方法を検討したり、地域と連携したボランティア活動をとおした評価を得たりすることにより生徒が自尊感情や自己肯定感を感じられるような取組の充実を図る。



3　取組の経過

(1) 平成 24 年度
様々に支援が必要な生徒が増えてきたことを受けて、特別支援委員会をサポート委員会に再編した。

◆活用した生徒への支援策◆
①特別支援パートナーティーチャー
②スクールカウンセラー
③ステップアップ・プログラム
④札幌若者ステーション

(2) 平成 25 年度
大学生によるピア・サポート及び学習支援を実施し、生徒が進路相談をはじめ様々な悩みを相談する姿が見られた。

(3) 平成 26・27 年度
平成 25 年度の取組を継続した。主体的に活動に参加する生徒が増えてきた。

(4) 平成 28 年度
ピア･サポート活動の内容の充実を図るとともに、地域と連携したボランティア活動の推進を図った。

4　取組の内容

1　北海道医療大学臨床心理学科の大学生によるピア・サポートと学習支援について

ア　ねらい
不登校を経験している生徒等に、他者とのコミュニケーションを図る居場所を提供するとともに、学習の支援を行う。

イ　対　象
希望生徒

ウ　内　容
10 月～12 月の水曜日、15:00～16:30、次のとおり実施した。

①全９回を「導入期・活動期・成長期」の３期に分けて実施した。
②導入期では、ゲームを中心に取り組み、触れあう時間に主眼を置いた。
③活動期では、ＳＧＥ的な要素を取り入れ、他者理解と円滑なコミュニケーションを図る機会を設定した
④成長期では、自己開示の機会を設け、自己を見付ける機会を設定した。

エ　成　果

終了後の生徒アンケートでは、他者との交流が楽しかったことや、自分の将来について考える機会となったとの回答があり、本校生徒の課題となる部分を効果があったことを確認できた。

２　個別カウンセリングの充実について

相談件数は減少しているが、相談内容はデリケートなものが多く、解決に向けてかなりの時間とカウンセラーの労力が必要とされるものがほとんどだった。

教員との円滑な情報共有とその後の適切な対応によって大事に至らなかった案件もあり、スクールカウンセラーと教員との連携の大切さを痛感した。

３　地域と連携したボランティア活動の充実

ボランティア活動をとおして奉仕の精神を育むとともに、地域の方々への恩返しの気持ちを込めた活動として取組を推進している。

地域の広報紙等で様々に評価されることで、生徒の自尊感情や自己肯定感、自己有用感を高めている。

５　次年度に向けて

１　成果

ア　中途退学者数及び不登校生徒数の推移

決して少なくない人数の生徒が小・中学校時代にすでに不登校を経験してきており、本校入学を機に生き生きと学校生活を送っているケースも多い。このような中、本事業の取り組みにより少しずつではあるが、減少傾向にある。

イ　その他の指標による評価

自ら積極的にボランティア活動に参加する生徒が多くおり、例年通り活動することができた。この活動は地域から感謝され、生徒は充実感や達成感を得ることができている。このことから、学校生活を前向きにとらえる生徒が増えてきている。

ウ　生徒の変容した姿

自分から出会いの場やコミュニケーションを求めて動こうとする姿勢や気持ちを少しでももっている生徒に対して、大学生との取組は大変有効である。比較的年齢が近い大学生に、大学生活等について進路相談をしたり、また、一緒にゲームをしたり学習支援を受けたりしながら楽しい時間を過ごすうちに、参加生徒も積極的に挨拶をしたり、笑顔が見られるようになった。

２　課題

本校入学をきっかけに登校できるようになった不登校経験のある生徒には、支援の手を差し伸べることができるが、学校に登校できていない生徒に対してどのように支援をしていくかが課題である。

問題を抱えたり、不登校傾向のある生徒の保護者から、スクールカウンセラーへの相談があるが、十分な時間の確保をすることができないという課題がある。

今後もスクールカウンセラーと連携を図り、生徒が少しでも登校できるような環境づくりを進めていきたい。

３　次年度に向けて

次年度も大学生の支援によるピア・サポートは継続する。これ以外にもコミュニケーションスキルトレーニングの機会を設け、より多くの生徒が体験できる機会を拡充していきたい。今後も様々な背景をもって入学してくる生徒に対して、学校生活と将来の夢に向かって前向きに取り組む機会を充実させるため、取組の充実に努めていく。

北海道江別高等学校

課　程：　全日制
学　科：　普通科・事務情報科・生活デザイン科
生徒数：　９３７名

１　取組の特徴

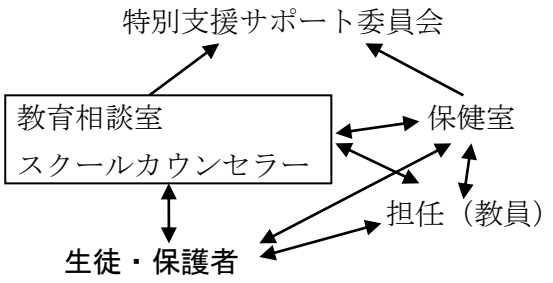
生徒のもっている自己開示や他者理解及び人間関係を調整する能力を伸ばし、望ましい学年や学級集団づくりを目指そうとする意欲を育てるために、保健局員を中心とした生徒に対してスクールカウンセラーによるピア・サポート研修会を月１回実施している。

また、スクールカウンセラーや外部専門家を講師に１年生及び２年生の全生徒を対象とした保健講話を実施し、心理教育的支援や生命の尊厳への理解を深める活動を行っている。

２　取組のねらい

スクールカウンセラーと連携し、生徒の自己開示や他者理解及び人間関係を調整する能力を伸ばし、互いを尊重し合い支え合う望ましい学年及び学級集団づくりを目指そうとする意欲を育てる。また、教育相談に対する教員の理解促進し、カウンセリングマインドを高めることによって生徒の人格的な発達を促す指導を充実させる。

＜組織図＞



３　取組の経過

４月　保健局活動ガイダンス（新入生歓迎会）
５月　１年保健講話「高校生のメンタルヘルス」個別面談
６月　hyper-QU（１学年）、個別面談
７月　ピア・サポート研修会①（オリエンテーション、構成的グループエンカウンター）、個別面談
９月　ピア・サポート研修会②（自己理解と他者理解）、個別面談
10月　ピア・サポート研修会③（トラストウォーク）、個別面談
11月　ピア・サポート研修会④（リラックス呼吸法）、個別面談
12月　２年保健講話「生と性を見つめよう」ピア・サポート研修会⑤（ことばの伝え方）、個別面談
１月　ピア・サポート研修会⑥（自分や相手の感情に気付く）
２月　ピア・サポート研修会⑦（悪魔のリスナー）
３月　ピア・サポート研修会⑧（ロールプレイ、１年間の振り返り）、個別面談

４　取組の内容

１　１年生向け保健講話

ア　ねらい

新しい環境に精神的な緊張や不安を抱えがちな新入生が、青年期の心の在り方やストレス・マネジメント及びコミュニケーションスキル、ソーシャルスキル等について学ぶ機会として実施した。スクールカウンセラーの講演によって、生徒が「心」に関する知識を身に付け、心身ともに急激に変化する思春期・青年期を生きる自己について考える契機となるよう支援した。

イ　対　象

１学年生徒（８学級 320 名）

４　取組の内容

ウ　内　容

本校スクールカウンセラーを講師として高校生のメンタルヘルスについて、中学生の心理的特徴と高校生の心理的特徴の違いについて説明があった。高校生の時期は、親から心理的に距離をとり、仲間との結び付きが強まる時期であると同時に心理的な孤立感を深く感じやすい時期であり、心のＳＯＳは体の様々な変化として現れやすいこと、傷ついたり疲れたりした心の手当てをどのようにしていくか等について説明がなされた。また、ストレスを感じた時の対処法として、実際にリラックス呼吸法を体験し、実生活の中で活用できるような講話であった。

エ　成果等

思春期・青年期の心理の特徴を知り、自分の変化に戸惑ったり、悩んだりすることが普通であること、そして誰かに相談することの大切さについて納得できたと感じられたようだった。また、スクールカウンセラーの役割がどういうものであるか認識できたという感想が多く寄せられた。

○　生徒の感想

・「なかなか相談できないことや、そう思っているのは自分だけではと不安になることも思春期として正常なことだと知り安心できた。」
・「困ったら信頼する人に相談することが大事だと分かった。また、自分だけでなく友人が困っていれば助けられる人になりたいと思った。」
・「こころの疲れが体の異常としてでることを知り、自分でも分からないストレスをそれで認知できるようになろうと思いました。」
・「小学１年の時のいじめがトラウマとなり、中学では同級生に自分から話しかけることができなかったので、今回の話はとても理解できた。適度に自分の中のものをはき出せるようになりたい。」
・「これから色々悩むことがあると思うが、スクールカウンセラーに相談できると知り、少し気が楽になった。」

２　２学年保健講話

ア　ねらい

生命尊重、自他を尊重する精神を基盤とした性についての好ましい価値観を確立し、将来を見通した適切な意思決定や行動選択ができる能力および態度を育てることをねらいとした。

イ　対　象

２学年生徒（８学級 313 名）

ウ　内　容

北海道助産師会理事・思春期相談士である安藤由美子氏を招き、「あなたの素晴らしい未来のために～生と性を見つめよう～」と題して御講演いただいた。実際の医療現場での体験を交えつつ生命誕生の尊さや生きることの素晴らしさについて語られ、自他の命や人格を大切にする力や男女交際の在り方、またＬＧＢＴについて正しく考える機会となる内容であった。

エ　成果等

講師による医療現場での生命誕生にまつわる貴重な体験談や胎内の立体映像及び医療器具の実物提示に、生徒は強い関心をもち、集中して耳を傾けていた。命の大切さや生きることの意味について、しっかりと考えることができた。

○　生徒の感想

・「気持ちが伝わってくる素晴らしい講話でした。安藤さんが経験してきた悲しい実話などが聞けてよかったです。講話を通して多くの人に正しい知識をもってほしい。また、ＬＧＢＴに偏見をもつ人が少なくなるといいと思います。」

4　取組の内容

・「自分が無事に産まれてここまで成長できたことが当たり前のことでは無いと分かった。無責任な行動はしてはいけないと改めて思った。」

・「赤ちゃんの出産が全て上手くいってるわけではなく、色々な人の人生がそこにつまっていて、悲しい出来事になってしまう人たちもいることをこの講話を通じて知りました。これから僕たちは思春期になって、色々なことで悩むことがあって大変だと思いますが、色々とそのことについて考え、悩み、学んでいくことが大切かもしれません。」

３　ピア・サポート研修会

ア　ねらい

参加者が自分自身をより深く知ることを援助する。その上で、他者と出会うこと、向き合うことがより丁寧にできるよう援助する。参加生徒が自己を知り他者と出会うことができるようになることで、教室での集団によいコミュニケーションが生じることをねらいとする。

イ　対　象

各クラスの保健局員と希望者合わせて生徒 49 名（教員４名）

ウ　内　容

毎回８人程度のグループに教員１名がついてワークを行った。自己紹介と他己紹介、相性の良い人と苦手な人、トラストウォーク、リラックス法と呼吸法、アサーション・トレーニングなど、３～４グループ(異学年編成)に分かれて各グループに教員１名がついて実施した。

グループの構成員を毎回変え、自己紹介と他己紹介を行った。記述式のワークの後はグループ内でシェアリングを行った。また、体験型の研修では、実際に目隠しをしてガイド役に導いてもらう体験を通じて、見通しのきかない状況にある人にどのように寄り添うか体験した。

エ　成果等

グループ内で自分の気持ちや考えを話すこと、自分の発言がグループのメンバーに受け入れられていること、また、教員に受け入れられていることを繰り返し体験することで、当初は大変緊張し小声で話していた生徒達も互いの顔を見合いながら発言したり、他者の話しを聴くことができるようになった。

また、当初他人と関わることに消極的な態度を見せていた生徒が、回を重ねるごとに他人の意見を聴く姿勢が前向きになり、自分の考えも積極的に話そうとするようになるなど、集団の中で成長し、日ごろの自分の対人的関わりを振り返る機会となった。「自分はこれまで相手の話を聞くときに相手の顔をきちんと見てこなかった」といった気付きが芽生え、相手を見て表情豊かに自分の考えを表そうとする態度が参加者の中に広まった。人前で自分の気持ちや考えを率直に話し、分からないことについては「分からないので教えてください」と尋ねる練習となり、「分からないことを教えてもらう」という関わりを通して、困ったときに他者に助けを求めることができるようになっていった。

○　生徒の感想

・「話したりしたことのない同学年の方や他学年の方と今回の研修をとおして仲良くなれてよかったです。」

・「緊張しました。他己紹介が予想以上に難しくて大変でした。でも楽しかったです。」

・「自分の考え、思いを伝える的確な言葉が見付からなくて苦労しました。時間のことを考えると、手短にでも相手にちゃんと伝えるのは難しいと思いました。ボキャブラリーを増やしたいです。」

・「声をかけても無視されることで困惑したり心が傷付いたりした。言葉を返すことの大切さを改めて知った。」

4　取組の内容

・「みんなであいさつすると自然にお互いが笑顔になれて良い雰囲気になりました。そうなることで相手に対する印象が急に良くなった気がしました。」
・「改めて私はこういう人が苦手で、こういう人が好きだったんだと確認することができました。苦手な人に接するときの正しいやり方を聞くことができてよかったです。」
・「普段は視覚に頼りっぱなしであることを痛感し、それが無くなったときの不安を感じました。でも、ガイド役の人が手をつないでくれたり背中に手を当ててくれたりしたことで、不安がだいぶ無くなりました。」
・「(相手が) 転んだりしないように常に気を配りっぱなしでした。だけど、何かに触れさせてあげたりすると相手の口元が笑って、それを見ると温かい気持ちになりました。」

・「言葉から色々な感情が読み取れると思いました。明るく話をしていても不安やとまどいがいっぱいで、少し無理して、友達を悲しませないようになどと我慢して話しているのかなと思っていました。」
・「自分も辛いことがあっても明るく笑いながら話をしますが、思っているよりも言葉はとても正直で感情を隠すことができないものだなあと思いました。」
・「みんなそれぞれの意見があってなるほどと思うことが多かった。人の感性を読み取るのは、すごく難しいなと改めて思った。」

5　次年度に向けて

1　成果

ア　中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者数は、平成 26 年度６名、27 年度５名、28 年度３名（29 年２月末）と減少傾向にある。不登校生徒数は、平成 26 年度３名、27 年度０名、28 年度２名（29 年２月末）と少数で横ばい状態となっている。

イ　その他の指標による評価

保健室年間利用者数（延べ人数）を見ると平成 26 年度 2357 人、27 年度 2495 人、28 年度 1835 人（29 年１月末）と減少している。１人当たりの欠席日数は平成 26 年度 2.9 日、27 年度 3.1 日、28 年度 2.8 日（29 年１月末）という状況である。

ウ　「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

本校１年生の対人関係に関するスキルの特徴として、他者への配慮や関係の持続に対する能力は比較的高い傾向にある。しかし、周囲に気を遣うあまり、自分の感情や意見を表明したり、援助や相談を求めることに消極的な傾向が見られる。

エ　生徒の変容した姿

ピア・サポート研修会に参加した生徒を中心に、コミュニケーションスキルの向上が見られ、感想からも他人の気持ちを想像することや考えることに積極的になっていく内的な変化の様子が読みとれる。

2　課題

保健局員を中心とした研修の継続と内容の充実、さらに日常的なピア・サポート活動として校内に定着させ、活動に対する全校生徒及び教員の認知度をより一層高めるための教育的な支援が必要である。

3　次年度に向けて

引き続き、スクールカウンセラーとの連携によるピア・サポート研修会をさらなる内容の充実を図りつつ実施するとともに、校内における日常的なピア・サポート活動の展開を目指す。また、１学年を中心にコミュニケーションスキルの向上を目指す具体的な取組を実施したい。

北海道野幌高等学校

課　程：　全日制
学　科：　普通科
生徒数：　６７５名

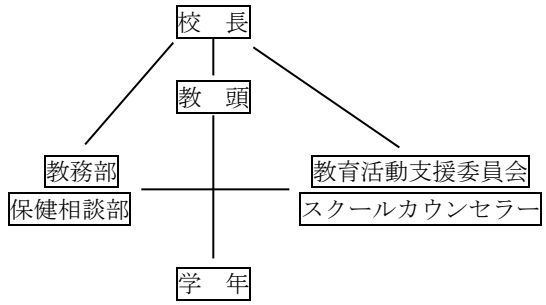
１　取組の特徴

生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成のためのコミュニケーションスキルトレーニングを計画的に実施するとともに、不登校や中途退学、いじめ未然防止を図る。

２　取組のねらい

基本的生活習慣や人間関係づくりの能力等、社会適応力が十分身に付いていない生徒に対し、スクールカウンセラーと連携し、教育相談や人間関係構築の方法等の学習・体験の機会を設け、自立した生徒の育成を目指す。

＜組織図＞



３　取組の経過

４月　子ども理解支援ツール「ほっと」の実施（１回目）
５月　生徒及び保護者へのカウンセリング
６月　生徒へのカウンセリング
７月　生徒へのカウンセリング
８月　生徒及び保護者へのカウンセリング、校内研修「ほっと」の活用方法
９月　生徒及び保護者へのカウンセリング、人間関係作りの講話（１年生全クラス対象）
10 月　生徒へのカウンセリング、子ども理解支援ツール「ほっと」の実施（２回目）
11 月　生徒へのカウンセリング
12 月　生徒へのカウンセリング、校内研修「ほっと」の活用方法
１月　生徒及び保護者へのカウンセリング、クラスコーチング（１年生）
２月　生徒及び保護者へのカウンセリング、クラスコーチング（２年生）
３月　生徒へのカウンセリング

４　取組の内容

１　子ども理解支援ツール「ほっと」の実施

ア　ねらい　　「ほっと」の結果から、生徒理解と人間関係づくりに活用する。
イ　対　象　　全学年

４　取組の内容

ウ　内　容　　年２回（４月・10 月）実施し、結果を分析し、クラス内の人間関係づくりと気になる生徒の理解と対応に活用する。

エ　成果等　　要素分析から、２回目では「表明」が高く、「緊張」が低くなったことから、人間関係を構築し、コミュニケーションをとりながら自分の考えを表現できるようなった。また「学業」が高くなったことから学校生活に対する動機付けが高まっている。因子分析から、「関係維持」が高い傾向にあるとともに、２回目では「仲間強化」が「自己統制」を上回ったことから、自己中心的から相手を理解し認め合い、より良い人間関係づくりへつなげることができた。

２　スクールカウンセラーによる校内研修（８月・12 月）

ア　ねらい　　生徒理解と人間関係づくりの指導の充実を図る。

イ　対　象　　教職員

ウ　内　容　　子ども理解支援ツール「ほっと」の結果の活用方法

エ　成果等　　教職員の知識や理解を深め、子ども理解支援ツール「ほっと」をより効果的に活用することができた。

３　スクールカウンセラーによる生徒及び保護者へのカウンセリング

ア　ねらい　　生徒や保護者の悩みを聞き、不登校や中途退学の未然防止、家庭での問題等の解決の充実を図る。

イ　対　象　　全学年の生徒及び保護者の希望者

ウ　内　容　　スクールカウンセラーによる個別のカウンセリング

エ　成果等　　スクールカウンセラーによる個別カウンセリングでは、保護者のカウンセリングを行うことで、多角的・多面的に生徒の課題を考察できるようになり、生徒理解の深化につながり、生徒の中途退学やいじめ未然防止につなげることができた。

４　人間関係作りの講話

ア　ねらい　　同世代の友人関係の構築には、ＳＮＳ等の急速な普及も相まって、深刻な問題も起きやすく、対人不安による不登校等も懸念されることから、望ましい人間関係の構築を図る。

イ　対　象　　１学年

ウ　内　容　　スクールカウンセラーによる講演

エ　成果等　　生徒は対人関係の基本である言葉によるコミュニケーションについて学ぶことにより、今後の人間関係係を築く関わり方を考えることができるようになった。

講演の様子

５　クラスコーチング

ア　ねらい　　解決志向に基づく問題発生予防の活動により、望ましい人間関係づくりを支援する。

イ　対　象　　１・２学年

ウ　内　容　　スクールカウンセラーによる日常の授業参観を通して、学習環境を良くする。

エ　成果等　　生徒は自己肯定感や自己有用感を高め、声や音などの他者に配慮した行動を身に付けることができた。

５　次年度に向けて

１　成果

ア　中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者及び不登校生徒は減少し、個々の生徒の人間関係づくりの悩みや困難を早期に把握し、兆候のある生徒に対し、即時に対応できるようになった。

イ　その他の指標による評価

①スクールカウンセラーによる人間関係づくりの講話やクラスコーチングにより、お互いの個性や自己有用感の尊重、いじめの未然防止やコミュニケーションの重要性等について考える機会を設けた。

②スクールカウンセラーと連携した生徒及び保護者のカウンセリングを実施し、生徒及び保護者の抱える課題の把握と適切なサポートに努めた。

ウ　「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

①要素分析から、２回目では「表明」が高く、「緊張」が低くなったことから、人間関係を構築し、コミュニケーションをとりながら自分の考えを表現できるようになった。また、「学業」が高くなったことから、学校生活に対する動機付けが高まっている。

②因子分析から、１回目・２回目ともに「関係維持」が高い傾向にあるとともに、２回目では「仲間強化」が「自己統制」を上回ったことから、自己中心的から相手を理解し認め合い、より良い人間関係づくりへとつながっている

エ　生徒の変容した姿

教育活動支援委員会、養護教諭、学年団及びスクールカウンセラーとの連携のもと、生徒理解の取組により、お互いを尊重する精神やコミュニケーション力を身に付け、より良い人間関係を築こうとする姿勢が見られるようになった。

２　課題

ア　学校不適応生徒による中途退学者を減少させるためのより効果的・具体的な支援

イ　子ども理解支援ツール「ほっと」を活用した生徒理解と活用の充実

３　次年度に向けて

ア　人間関係づくりやコミュニケーションスキルの育成に向けた早期の構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングの実施

イ　教育活動支援委員会の機能を向上させた個別の指導計画の充実

北海道岩内高等学校

課　程：　全日制
学　科：　普通科・事務情報科
生徒数：　３４４名

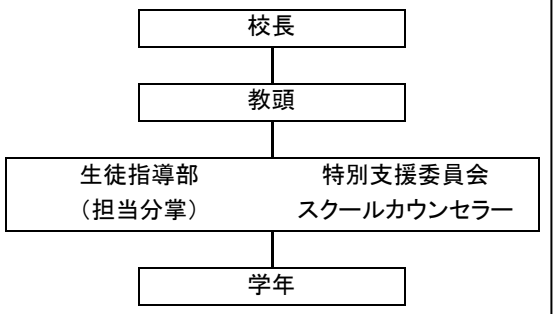
1　取組の特徴

・ピア･サポート活動やアサーショントレーニングを通して、コミュニケーション能力を育成する。
・「ほっと」等を活用し、実施集団の特性や個人の集団適応状態を把握し、支援を必要とする生徒に対して、個別面談やカウンセリングを実施する。
・教職員・生徒等の自殺予防に関する正しい知識や援助希求の重要性に関する知識を高める。

2　取組のねらい

・スクールカウンセラーとの連携のもと､「生徒のコミュニケーション能力の育成」と「個別面談やカウンセリングの充実」を図り、生徒が円滑な人間関係を構築し、落ち着いた学校生活を送ることができるよう支援する。
・自殺予防の効果的な取組を実践する。
・「ほっと」を活用した生徒の実態把握による効果的な指導の体系化を図る。

〈組織図〉



3　取組の経過

４月（１学年）
宿泊研修における構成的グループエンカウンターの実施（ネイパル森）
５月・11 月（全学年）
学校生活での心と体の状況に関する実態調査
９月・２月（１、２学年）
「ほっと」の実施
９月（教職員）
「自殺予防」と「ほっと」に関する校内研修会の実施
９月（１学年）
ピア・サポートトレーニング
（講師：中野　武房　氏）

９月・11 月・２月（全学年）
思春期教室（講師：社会人（３年生)、大学生（２年生)、在校生（１年生))
11 月（全学年）
自殺予防教育に関する生徒対象アンケート

通年
・ボランティア活動（町内清掃）等
・スクールカウンセラーによる生徒へのカウンセリング等
・教科（授業）におけるペアワークやグループ学習等

4　取組の内容

１　思春期教室

ア　ねらい　対話型ワークショップにより、生徒の「未来のビジョンを考えること」と「コミュニケーション能力を高めること」を目的とする。

イ　対　象　全学年

4　取組の内容

ウ　内　容　３年生は社会人を、２年生は大学生を、１年生は卒業を控えた本校３年生を講師として、今後の進路等について、先輩達の体験談を聞いたり質問したりするなどして、コミュニケーション能力の向上を図り、自分の将来を考えるきっかけづくりとした。

エ　成　果　１年生は、事前にピア・サポートトレーニング等を導入することができたため、より効果的にこの取組を行うことができた。

２　自殺予防等に関する校内研修会

ア　ねらい　「ほっと」の分析等をもとに、効果的な自殺予防等の実践を図る。

イ　対　象　教職員

ウ　内　容　外部講師より、「ほっと」の分析方法と自殺予防等に関する講習を受け、「ほっと」による生徒状況の把握を基にした効果的な自殺予防等の取組について協議を行った。

エ　成　果　教職員の自殺予防等に関する知識と理解を深めることができた。

5　次年度に向けて

１　成果

ア　中途退学者数及び不登校生徒数の推移

・中途退学者　平成 27 年度（５名）→平成 28 年度（４名）
　※１学年が２名から１名に減少した。

・不登校生徒　平成 27 年度（０名）→平成 28 年度（０名）

イ　その他の指標による評価

・教育相談に関する取組を活用する生徒の増加
　スクールカウンセラーの活用数（12 名）、癒やしの部屋（相談室）の活用数（33 名）
　※保健室年間相談者数も増加傾向にある。

ウ　「ほっと」の実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

・対象学年（１学年）における生徒のコミュニケーション能力が高まりつつある。

エ　生徒の変容した姿

・取組回数を重ねるごとに、本プログラムの活動に対して、生徒が意欲的に取り組む姿勢が見られた。

２　課題

生徒が命の尊さの理解を深めることができるよう、自殺予防等について考える機会を設定する必要がある。

３　次年度に向けて

スクールカウンセラーと連携した教育相談や、アサーショントレーニング等のコミュケーションスキルの向上を目指した取組の充実を図り、良好な人間関係の構築ができるよう学校全体で取り組んでいく。